

主 題：デレス：神のことばは打ちひしがれた魂
 聖書箇所：詩篇 119篇25-32節

ここ数十年の間に、私たちの社会において何らかの形で非常に深い落胆を経験する人、もしかすると「うつ」と言ったほうが良いかもしれませんが、そのように経験を人、また、そのように診断される人たちが増えて来ました。2008年に行なわれたある一つの統計によると、2008年の段階で日本には約100万人を超える人たちが何らかの「気分障害」と言われる症状であると診断を下されているとなっています。その数は年々増えています。ある一つの医療機関の資料によると、このように気分障害などで診断を下された100万人を超える人たちの三分の一程度が、うつ的な、非常に深い落胆を経験するような状態から完全に回復することができるかと書いてあります。つまり、三分の二は完全な回復を見ないのです。そして、その多くの人たちが何度もこのような状態を繰り返すと記されています。確かに、この落胆においてはその度合いの違いがあると思います。でも、間違いのないことは、ここにおられる皆さんすべては、何らかの形でこのような深い落胆を人生の中で経験することがあるはずで、間違いなく、私たちはみな深い落胆に陥ることがあります。私たちのたましいが打ちひしがれてしまう、そのようなことがあるはずで。

事実、偉大な信仰者と言われるあのパウロでさえ、このような深い落胆を経験しました。日本語の聖書では余りはっきりとは分からないのですが、英語ではいわゆる「うつ」と言われる単語があるのです。「depression」「depress」ということばを使いますが、そのように訳すことができることばがⅡコリント7：6で使われています。7：5-6をご覧ください。「マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。：6しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことによって、私たちを慰めてくださいました。」、6節にある「気落ちした」ということばが「落胆した、うつ的になってしまっている状態」を言い表します。「私はこのように落胆していたが、落胆している者たちを慰めてくださる神の慰めによって私は慰められた。」とパウロは言っているのです。迫害があったのです。彼の身は毎日のように危険にさらされていました。そして、外面的な様々な困難だけでなく、内側には、このコリントの教会の人々に対する様々な心配、不安があったのです。

皆さん、パウロも神からの慰めが必要だったのです。パウロも落胆していたのです。このような打ちひしがれたたましいをもつことは現実のことです。私たちはそれを隠す必要はありません。また、このように人生の様々なときにおいて、深い落胆を経験することを恥じる必要もありません。ただ、私たちがはっきりと分かっていること、しっかりと理解しなければいけないことは、私たちはキリストにあるクリスチャンとして、救われている者として、このような落胆した状態に継続的に留まり続けることは、聖書的なオプションではないということです。それは聖書的な生き方ではありません。キリストにある者として、私たちはパウロとともに言わなければいけないのです。「気落ちした者、落胆した者、うつな者を慰めてくださる神は、私たちを慰めてくださいます。」と。私たちは神のみことばによって、神ご自身によって、約束を与えられているのです。私たちが御霊に満たされ、御霊によって歩んで行くときに、私たちの内には御霊の実が生み出されます。御霊の実とは何でしたか？ガラテヤ5：22-23「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、：23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。」、私たちはどのような状態に陥っていようとも、御霊に満たされて御霊によって歩んで行くときに、このような御霊の実を内にしっかりと実らせて生きて行くことができるのです。そこには「愛」があるのです。そこには「喜び」があるのです。そこには「寛容、親切、平安」があります。私たちはそのように生きて行くことができるのです。

医療や精神心理学に携わる様々な専門家が言っている意見とは異なり、私は本当のクリスチャンたち、真の信徒たちは、このような大きな落胆から回復することができることを確信しています。なぜなら、聖書がそのことを私たちに教えるからです。それゆえに、今日皆さんに私は非常に重要な質問をします。それは、皆さんは神とそのみことばを信頼するか、それとも、この世にある社会通念を信頼するか、どちらを信頼しますか？ということです。なぜ、このようなことを私が話そうとしているのかというと、それは今日皆さんといっしょに見て行こうとしているみことばが、私たちにそのことを強く訴えるからです。

前回、私たちは詩篇119篇の第3区分、第3枝節で、著者が、私たちが人生の様々な困難の中にあ

って、どのように落胆から身を守ることができるのかというその術を話していたことを見ました。17節から24節にそのことが記されています。その後、この詩篇の著者は私たちに、私たちがこのような深い落胆に陥ったときに、どうすればそこから回復して行くことができるのかを教えてください。今日見て行く第4区分に当たる「デレス」ということばで始まる25-32節は、私たちに、どうすればそのような深い落胆から、もうどうしようもなく落ち込んでしまっている状態から、神を見上げて希望を持って生きて行くことができるのかを教えてください。それをやるに当たって著者は、自らの体験に基づく二つの例証をあげ、そして、最後にその結論を述べます。今日、皆さんと一っしょにそれを見て行こうと思います。詩篇119：25-32を読みます。

- :25 私のたましいは、ちりに打ち伏しています。あなたのみことばのおりに私を生かしてください。
- :26 私は私の道を申し上げました。すると、あなたは、私に答えてくださいました。どうか、あなたのおきてを私に教えてください。
- :27 あなたの戒めの道を私に悟らせてください。私が、あなたの奇しいわざに思いを潜めることができるようにしてください。
- :28 私のたましいは悲しみのために涙を流しています。みことばのおりに私を堅くささえてください。
- :29 私から偽りの道を取り除いてください。あなたのみおしえのおりに、私をあわれんでください。
- :30 私は真実の道を選び取り、あなたのさばきを私の前に置きました。
- :31 私は、あなたのさとしを堅く守ります。主よ。どうか私をはずかしめないでください。
- :32 私はあなたの仰せの道を走ります。あなたが、私の心を広くしてくださいからです。

ヘブライ語の4番目の文字「デレス」という文字で始まる第4区分において、非常に重要なカギとなる単語が一つあります。それは「道」と訳されていることばです。「デレク」というヘブライ語のことばが使われているのですが、このことばは常に先頭に出て来ます。「デレス」という4番目の文字で始まることばだから「デレク」です。このことばは日本語の聖書を見ても分かるようにここに5回出ています。26、27、29、30、そして、32節です。このことばによって、この詩篇のアウトラインを私たちに与えていると私は思います。25-27節と28-30節で、たましいが打ち砕かれてしまっているとき、打ちひしがれたたましいをもっているときに何が起こったのか、何を起こさなければいけないのか、そのことを二つの事柄を通して私たちに教えてください。そして、31-32節でそのまとめをして行きます。深い落胆を経験したこの著者が、どのようにそれに打ち勝って行こうとするのか、打ち勝っていったのか、そのことをご一っしょに見て行きましょう。

☆深い落胆から回復して行くために

症例1：砕かれたたましいの癒し 25-27節

1) 状態 25a節

最初に、この著者は彼の状態を私たちに教えてください。25節「私のたましいは、ちりに打ち伏しています。」と、これは自分のたましいが、いや、自分自身のそのすべてが、壊滅的な状態にある。打ちひしがれている、もうどうしようもなくなっていると、そのことを象徴的に話しています。ここで訳されている「打ち伏す」という動詞は、実は、70人訳聖書（ヘブル語をギリシャ語に訳している）では「張り付けられている、糊付けされている」と訳すことができる単語に置き換えられています。つまり、この著者は、余りにも深い落胆のゆえに、地面に張り付いてしまってもう動くことができない、もう打ちひしがれて立つことができないという、そのような状態にあると言っているのです。

特に、旧約聖書において、深い嘆きを持つ人たちは、地のちりで自らの頭を覆い、灰の中に座って悲しみを表わす姿が表現されています。著者はそのような状態が自分に張り付いてしまっていて、そこから決して抜け出すことができないと言っているのです。どのようなことをしてもこの嘆き、この悲しみ、この打ちひしがれた状態から脱することができないと言うのです。ヨシュア記の7章を見てください。打ちひしがれたたましいの状態、砕かれてしまったたましいがどんなものかを、私たちはそこに見て取ることができます。アイという町で戦いをしたイスラエルの軍勢はそこで敗北を喫するのです。敗北を経験したヨシュアは、ヨシュア記7章でこのように記しています。6節「ヨシュアは着物を裂き、イスラエルの長老たちと一っしょに、主の箱の前で、夕方まで地にひれ伏し、自分たちの頭にちりをかぶった。」、悲しみ、深い嘆きの表われです。ヨシュアのことばを見てください。7-9節「ヨシュアは言った。『ああ、神、主よ。あなたはどのようにしてこの民にヨルダン川をあくまでも渡らせて、私たちをエモリ人の手に渡して、滅ぼそうとされるのですか。私たちは心を決めてヨルダン川の向こう側に居残ればよかったのです。:8 ああ、主よ。イスラエルが敵の前に背を見せた今となつては、何を申し上げることができましょう。:9 カナン人や、この地の住民がみな、これを聞いて、私たちを攻め囲み、私たちの名を地から断ってしまうでしょう。あなたは、あなたの大いなる御名のために何をなさろうとするのですか。』」。皆さん、聞こえましたか？ヨシュアのぼろぼろ

になったたましいの叫び、深いたましいの叫び、その心…。

皆さん、このヨシュアは、カナンの地に送られて行った12人の斥候たちの一人で、彼らがそこから帰って来たとき、彼は何と言いましたか？他の10人の斥候たちがみな「そこへ入ることは無理だ」と言った時に、人々に励ましを与えました。勇気に満ちた力強い勇ましい若者だったヨシュアは、たった1回の敗北で、このような深い悲しみの中に陥り、そして、落胆に基づいた発言をしているのです。皆さん、偉大なる勇者も一時的な落胆に陥るのです。私たちは「私は落胆することなどありません。」と言えないことは、自分が一番よく分かっています。

同じように、この著者も心沈んでいました。彼のたましい、彼自身のそのすべては、まるで、地面に張り付けられてしまったかのように、もうそこから立ち上げることができないような大きな悲しみの中に沈んでいたのです。彼の心は砕かれていました。ぼろぼろになっていました。そこにはあたかも希望などどこにもないかのように見えたのです。

2) 叫び 25b節

そのような状態を説明した後、この著者は「叫び声」を上げます。彼は叫ぶのです。「あなたのみことばのとおり、私を生かしてください！」と。ここで言う「生かしてください」とは、すでに17節で見たように、これは単に「いのちを守ってください、生き永らえさせてください」ということだけではなく、私のいのちが満ち満ちたものになるように、豊かに生きて行くことができるようにしてくださいという懇願です。それは今、彼が経験しているぼろぼろになって、悲しみに沈んで地に張り付けられているような状態とは正反対の状態です。

私たちも同じように、このような深い悲しみを経験するとき、深い落胆をもつときに叫びませんか？「助けてください！どうか、生かしてください！」と。でも、私たちとこの著者の違う所は、どこにその助けを求めるかです。何に基づいてその助けを願い求めたのかです。著者は「あなたのみことばのとおり私を生かしてください。」と言っています。この著者がよく分かっていたことは、彼のたましいの再生は神のみことばにのみ基づいて起こることです。彼のたましいの再生は、神がみことばをもって約束してくださっているから、私に与えられると思っているのです。「あなたのみことばのとおり私を生かしてください。」と。私たちがこのような状態から脱却して行くことは、何も無いところで突然起こるものではありません。私たちが再びいきいきとした生涯を生きて行くことは、何となく過ぎていて、あるとき突然起こるものではないのです。満ち満ちた人生への真の回復は神のみことばのとおり、みことばに基づいてのみ起こるのです。

神は私たちご自身の民とした者たちに祝福に満ちた生涯を約束しておられます。私たちの主はご自身の子どもたちに恵みとあわれみを溢れんばかりに注ぐお方です。みことばはそのように私たちに教えていませんか？詩篇の著者はそのことをよく分かっているゆえに、詩篇71：20でこのように言っています。「あなたは私を多くの苦しみと悩みとに、合わせなさいましたが、私を再び生き返らせ、地の深みから、再び私を引き上げてくださいます。」と。

この詩篇119篇を読んで行くとき、著者が何度も同じ祈りをするのを私たちは見ることができます。25節と同じ表現が9回出て来ます。25節「私のたましいは、ちりに打ち伏しています。あなたのみことばのとおり私を生かしてください。」、37節「むなしいものを見ないように私の目をそらせ、あなたの道に私を生かしてください。」、40節「このとおり、私は、あなたの戒めを慕っています。どうかあなたの義によって、私を生かしてください。」、88節「あなたの恵みによって、私を生かしてください。私はあなたの御口のさとしを守ります。」、107節「私はひどく悩んでいます。主よ。みことばのとおり私を生かしてください。」、149節「あなたの恵みによって私の声を聞いてください。主よ。あなたの決めておられるように、私を生かしてください。」、154節「私の言い分を取り上げ、私を贖ってください。みことばにしたがって、私を生かしてください。」、156節「あなたのあわれみは大きい。主よ。あなたが決めておられるように、私を生かしてください。」、159節「ご覧ください。どんなに私があなたの戒めを愛しているかを。主よ。あなたの恵みによって、私を生かしてください。」、ことばは少しずつ違っていても言っていることは同じです。「神さま、あなたが言うておられるとおりに、あなたが約束しておられるとおりに私を生かしてください。」と、これがこの詩篇を通して記されている著者の心からの祈りなのです。

九つの節を見ましたが、それに加えて、28節、58節、65節、76節、116節、124節、169節、170節には、それに近い表現で同じ願いがなされています。「私を生かしてください。」と。28節はこの後見ますが、「私のたましいは悲しみのために涙を流しています。みことばのとおり私を堅くささえてください。」とあります。ダビデは詩篇138：7でこのように語ります。「私が苦しみの中を歩いても、あなたは私を生かしてください。私の敵の怒りに向かって御手を伸ばし、あなたの右の手が私を救ってください。」、だれが私たちを生かしてくださいのか？だれが私たちに再生を与えてく

れるのですか？それは神だけだと言うのです。神の約束に基づき、神が私たちに働いてくださるときに、私たちのたましいは豊かに生きる者に変えられるのです。この深い落胆の最中であって、悲しみの深みにあって、著者は「神の御座」に目を向けるのです。そして、そこから神の助けを、ふさわしい力を願うのです。

この著者は、この方以外から助けが与えられることがないことをよく分かっていたのです。すでに、24節で「まことに、あなたのさとしは私の喜び、私の相談相手です。」と言っているからです。著者はこのような深い悲しみをもったときに、自分のカウンセラーがだれかをよく知っていたのです。どこに行けば自分のたましいが喜ぶのかをよく分かっていたのです。この「みことば」がそれだと…。皆さんを造られた方が皆さんのたましいをだれよりもよく知っています。皆さんを子どもとされた以上に、皆さんのことを気遣っておられる方は他にはおられません。ご自身の約束をお破りになることのない真実な神は、決して、私たちに対するその約束を破らないのです。

皆さん、騙されないでください。惑わされないでください。皆さんの助けは人からも人の知恵からもやって来ないのです。私たちの助けは著者が美しい表現で言ったように「天地を造られた主」からのみやって来るのです。皆さん、深い悲しみの状態にあった著者は、主を見上げてたましいの叫びを上げました。「主よ、どうぞ、私を生かしてください。あなたの約束のとおり私を生かしてください。」と。

3) 癒し 26-27節

では、どのように癒しが与えられるのでしょうか？どのように具体的な助けが為されるのでしょうか？そのことが26-27節に記されています。例え、私たちが神を見上げて神に助けを願ったとしても、それだけで自動的に私たちに助けが与えられるのでしょうか？そうではありません。皆さんも経験ありませんか？「祈ったのにさっぱり助からない！」などと…。「祈って待つ」ということは必ずしも聖書的に良い作戦ではないのです。祈ったから神が何とかしてくださるだろう…。早くしてください、と待っているだけはいけません。私たちには、その祈りに沿って為さなければいけない行動、責任があるのです。私たちのたましいが癒やされて行くときに、適用しなければいけない事柄、行なってゆかなければいけない事柄があります。その事柄は二つのことによって記されています。

◎たましいを回復して行く方法

一つは、私たちが置き換えなければいけない道があるということです。もう一つは、私たちが理解しなければいけない道があるということです。そのことが26-27節に記されています。

a. 置き換えられなければならない道

26節「私は私の道を申し上げました。すると、あなたは、私に答えてくださいました。」、この表現は幾つかの方法で理解することができますが、この箇所を学んで行くに当たって、この26節・27節と、29節・30節に出て来る文法的な、ここに記されている詩の形を通して見えて来る並行法に目を向けます。明らかなのは29-30節です。29節では「偽りの道」とあり、30節には「真実の道」と記されています。一方が悪い方でもう一方が良い方です。この詩篇全体の形、特に、25節から32節の第4区分の形を見て行くときに、この並行法というものを非常に強く感じます。それが明確に現わされています。それゆえに、この26-27節の部分も二つのことばに使われている同じことば「道」は、一方を良くないものとして、もう一方を良いものとして捉えるべきと私は考えます。

そのように考えたときに、この著者が言っていることは何かということですが、彼は「私は私の道を申し上げました。」と言います。この「道」は複数形が使われています。ちなみに、残りの四つはすべて単数です。「私の道々」ですが、この「道」は神が示している道としてこの詩篇119篇で一貫して使われていますが、基本的に、このようなことを表わします。神の特徴に沿った生き方、その生きて行く方向性のことです。それゆえに、「私の道々」と著者が言うのは「私自身がもっている特徴を反映させている生き方の幾つか」です。そして、ここで彼が言っていることは、これを否定的に捉えるなら、神が求めておられる道とは違う自分自身の特徴に沿った、生きている考え方や方向性としての「道々」なのです。言い換えるなら、このように捉えることができるでしょう。彼は自分の犯してきた罪を告白しているのです。自分自身の特徴に沿った道だとするなら、神の特徴と必ずしも沿っていないとするなら、そこにあるのは、神の前に正しくない道である訳です。それゆえに、彼はその罪を悔い改めて神の前に告白している、そのように理解することができます。実際にそうしていたのかもしれませんが。

もう一つは、それはパウロがピリピ人への手紙4章6節で言っていることと同じことではないかと私は思います。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。」、思い煩ってはいけません。少しこのことを考えてみましょう。なぜ、私たちは落ち込むのでしょうか？なぜ、私たちは落胆するのでしょうか？なぜ、私たちは深い悲しみに陥ってもう立ち上がることはできないと考えるのでしょうか？不安になってどうしよう

もなくなるのでしょうか？なぜ、私たちはそこで喜びを失ってしまうのですか？それは、私たちが経験する人生の様々な事柄に私たちが捕らわれてしまうからではないですか？それで私たちは不安になって、いろいろなことに思い煩い、様々な問題に目を向けるようになってしまうのです。自分たちの健康、経済的な状況、将来のこと、家族のことなど、私たちは様々な事柄に目を向けてそれに集中してしまっただけで思い煩うから、私たちの頭、私たちの心はいったいだれがすべての主権者であるのかを忘れてしまうからです。その時に私たちの心は深く沈み立ち上がれなくなりませんか？「もう駄目だ…、このままではどうしようもない！」と、それが私たち自身の特徴を現わしている道ではありませんか？自分では何もできません。まさにその通りです。それに沿った道を歩んで行くなれば、私たちはいつまで経っても何もできない者としてしか生きられないのです。だから、私たちはその道を取り除かなければいけないのです。パウロが言うことは「あなたがたは思い煩うことがあるでしょう。でも、その思い煩いを主の前に祈りをもって出して行きなさい。神があなたの心配をしてくれるから。あなたはその主に祈り委ねて生きて行きなさい。神の方に目を向けなさい。」です。この著者がしたことは、実は、これと同じことなのかも知れません。

私たちはこのようなことを聞きませんか？例えば、あなたがクリスチャンになって、クリスチャンとしてのすばらしい信仰に喜びに満ちて歩んでいる、その最初の熱のあるしばらくの間は良いけど、いろいろなことが起こって来て、現実と直面すると「なかなか上手く行かないでしょう、いろいろなことを自分でやらなければならないでしょう…」と、そのようなことばを私は何度も聞いたことがあります。

「現実と直面したときに信仰だけでは十分ではないでしょう。あなたが何とかしなければいけないでしょう。」と、もしかすると、皆さんもそのように思ったことがあるかもしれません。

確かに、皆さんはもしかするとこのように言うかも知れません。「だって、信仰は私たちの食卓に食事を置いてくれないでしょう。信仰は私の子どもたちに教育を与えないでしょう。信仰は私たちの家族に着物を備えないでしょう。信仰は私たちのいのちを永らえさせないでしょう。」と。でも、皆さん、もし、そのように思っているなら皆さんの考えは明らかに間違っています。

確かに、様々な困難と直面するときには現実が私たちにぶつかるのです。現実気付くのです。ガツンと頭を打たれるのです。その通りでしょう。私たちはその現実と打たれなければいけないのですが、ただ、その打たれる現実とは、私たちが何かをしなければいけないという現実ではなく、神が私たちの主権者であり、私たちは神の言われる通りに生きていかなければいけないという現実でなければいけないのです。マタイの福音書6章に記されていることを皆さん覚えておられるでしょうか？6：25-34「だから、わたしはあなたがたに言います。自分のいのちのことで、何を食うか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。：26 空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。：27 あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。：28 なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。：29 しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。：30 きょうあっても、あすは炉に投げ込まれる野の草さえ、神はこれほどに装ってくださるのだから、ましてあなたがたに、よくして下さらないわけがありませんか。信仰の薄い人たち。：31 そういうわけだから、何を食うか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。：32 こういふものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。：33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。：34 だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」、神は私たちの必要を良くご存じです。皆さん、イエスは何を心配しなさい、何を気遣わなければいけないと言われましたか？私たちが人生の困難と直面したときに私たちは何を求めないといけないのですか？31節「そういうわけだから、何を食うか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。」、33節「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。」です。

皆さん、誤解しないでください。私は皆さんが単にそこに座って人生の困難を神が解決して下さることを待ってくださいますよと言っているのではありません。「神の国とその義とをまず第一」にするから、私は取り敢えず、人生の問題や事柄に積極的に問題を解決することはしないで、神のことだけを考えて生きて行きましょうと、そのようなことを言っているのではありません。私が言うことは、私たちがしなければいけないことは、神が私たちに求めることをその困難の中でしっかりとやっただけで行かなければいけない、ということです。例えば、もし、皆さんが学生なら試験について思い煩うべきではありません。それが自分の人生においてどれ程重要な試験であっても、私たちは思い煩うべきではないのです。でも、

だからと言って、神が試験の最中にその解答を耳元でささやいてくださる訳ではないですね。だから、何をするのか？自分に与えられた責任を全うすることです。与えられている時間を有効に用いて、主の前に主が与えてくださっている能力の最大限を用いて、一生懸命にその試験に備えて勉強するのです。受かったらどうしますか？神がそのように働いてくださって試験に合格させてくださったことを感謝して喜ぶのです。失敗したらどうしますか？私たちはそのようにしっかりと一生懸命努力して学ぶ機会を与えてくださった神に感謝し、神の主権に信頼を置いて、神が導いてくださる道に期待をもって希望をもって生きるのです。

私たちはもしかすると、自分の健康に不安をもっているかもしれません。何かの病気だと言われました。「神さま、癒やしてください、助けてください」と言ってそのまま放って置きますか？自分のからだを管理することも神が求めておられることではないですか？それゆえに、必要な治療を受けようと思います。そして、神がどのように働いてくださるのかを期待しながら、どのような状況にあっても神に感謝しながら生きて行くのです。仕事がなくなりました。どうしますか？「神が与えてくださるまで待っておこう」と言いません。仕事を得るためにしなければならぬことがあるし、その次の就職先を探すまでの間、自分が養わなければならない人がいるなら、どうすれば養うことができるのかをしっかりと考えて、働き続けなければいけないのです。

神は私たちに与えている「命令」を守りなさいと言われます。自分で自分の人生の問題を解決しようと躍起になるのではなく、そのことに精神を注ぎ続けるのではなく、「わたしが今あなたが置かれている状況で命じていることを熱心に行なってゆくことに思いを注ぎなさい。」と言われることを守ることで。皆さん、神は皆さんの必要を知っているのです。神は皆さんに必要な助けを与えるのです。それゆえに、私たちは神の御座に祈りをもって私たちの思い煩いを預けて行かなければいけないのです。そして、いろいろな事柄に思い煩う代わりに、神が自分の置かれている状況に求めておられることに一生懸命専心して行かなければいけないのです。

どうすればそのことを行なってゆくことができるのかを考えなければいけないのです。神が何を求めておられるのかを一生懸命知っていかなければいけないのです。私たちの人生の様々な問題、様々な事柄は神の知識とそれに対する従順とで置き換えられていかなければいけません。著者は言いました。

「私は私の道を申し上げました。すると、あなたは、私に答えてくださいました。」と、神が答えてくださるのです。「どうか、あなたのおきてを私に教えてください。」

私たちには「置き換えられなければいけない道」があります。私たちの特徴を反映させた道がそこにあってはいけません。主を反映する道を歩むから「だから、教えてください。だから、生かしてください。」と願うのです。

b. 理解されなければならない道 27節

27節「あなたの戒めの道を私に悟らせてください。私が、あなたの奇しいわざに思いを潜めることができるようにしてください。」、ここで著者が求めていることは深い理解です。神が求めておられる生き方をしっかりと深く理解することです。それによって彼のたましいが癒やされると言うのです。ここで使われている「悟らせてください。」ということばは、単なる知識、いろいろな情報を持っているということではありません。深いしっかりとした知識のことです。神によってのみ与えられるものであり、それゆえに、この著者は神にそれを願い求めるのです。私たちは神の律法を心から行なって生きて行きたいと願います。それゆえに、「どうぞ、その道を悟らせてください。」と主に願い求めるのです。

私たちは神に関する知識を持っています。神が求めている道がどのような道かを私たちは知っています。でも、往々にしてその知識は非常に表面的で、単なる情報の収集でしかない場合があります。私たちは「神さまは良い方です。」と言います。「神さまはご自身を愛する者たちに良く働かれるのだ。」と。でも、私たちが自分の人生の中にあって余り良いことを経験しないなら、私たちはその知識を捨てて、神の前につぶやき始め深い落胆に陥るのです。そのようなことないですか？私たちは神の前に立って、「いったい、いつまでですか？」と言うのです。「あなたが約束してくださった良いことはどこにあるのですか？」と。これがまさに、私たちがいかに深い知識に欠けているのかを証明することばでありません。

詩篇の著者がここで願い求めたことは、私たちがこのような深い理解を持つことです。なぜなら、そうするときに著者は神のみことばに目を向けて、神が成してくださる深いみわざに思い巡らすことができるからです。日本語の新改訳聖書はこの27節の後半部分を祈りであるかのように記していますが、本来なら、このように訳されるべきだと思います。「あなたの戒めの道を私に悟らせてください。それで、私はあなたの奇しいわざに思いを潜めます。」と、「そのようにできるようにしてください」ではなく「そうします」と言っているのです。

ここで言う「奇しいわざ」とは奇蹟的な事柄ではありません。神の成している神のみこころの現われのことです。みことばを通して、それがしっかり現わされているその事柄を言っています。この表現、「奇しいわざ」はこの詩篇の中に3回出て来ますが、いずれも「みことば」を指しています。つまり、神の道に関する深い知識をこの著者が得ることによって、著者は神のみことばを通して現わされている神のみこころに目を向けるのです。それに思いを巡らし始めるのです。今までは、自分の目で見てすべてのことを理解しようとしていたのですが、神のみこころに思いを潜めることによって、彼は自分の人生に起こっているあらゆる事柄を、神のみことば、みこころというメガネを通して見るのです。これまでは自分の感情に沿って起こっている様々なことを解釈したのですが、著者は神のみこころに思いを巡らすことによって、みことばに思いを巡らすことによって、その知識に基づいてすべてを解釈するようになるのです。そうすれば、深い悲しみに陥る必要はないのです。「もうここから抜け出せません」と言う必要はないのです。私たちが心砕かれて、ちりに打ち伏してしまっているときに、私たちは神に関する深い知識を忘れてしまっているのです。それに思いを巡らすとしないのです。神がどのような方であり、神が何をなさる方なのかを無視してしまうのです。そして、その代わりに、私たちは自分自身の理解、自分自身の感情に基づく解釈によって、すべての事柄を判断しようとするのです。

これでは落胆するのも当然です。なぜなら、このような理不尽な社会に生きているからです。罪に満ちた、汚れに満ちた人生の中であって、私たちが落胆しない訳はないでしょう？でも、そこに居続ける必要はないのです。神の目ですべてを見るなら、すべては良い方向へと進むはずだからです。

一番目のケースを見ました。二番目のケースも実は、余り違うことを言うてはいません。簡単に目を通しましょう。

症例2：嘆き悲しむたましいの癒し 28-30節

同じように、ここでは「嘆き悲しむたましいの癒し」について話をしています。それが28-30節に記されています。

1) 状態

28節「私のたましいは悲しみのために涙を流しています。」と状態が記されています。原文を見ると、言わんとしていることが良く分かります。「私のたましいは涙で溶けてしまっています。」。ほとぼしり出る涙のゆえに、自分のたましいが塊ではなくて、もうどろどろに溶けてしまって何もなくなってしまっているような、そのような深い悲しみ中にこの著者は陥っていると言うのです。まさに、ここでも打ちひしがれたたましいの現われを私たちは見ることができます。

皆さんもこのような悲しみを経験したことがありますか？「もう、立ち上げれない」と思うほど溶けてしまって、堅い部分が何一つないから起き上がることなど絶対にできないのです。深い悲しみゆえに、もう明日があるかないかも分からない、そのような嘆きの中に陥ってしまうのです。それがこの著者が経験していた状態だったのです。

2) 叫び

彼は叫びます。「みことばのとおり私を堅くささえてください。」と。「私を力づけてください」とも訳せます。どろどろに溶けてしまっているから立つことができないから、「主よ、どうぞあなたの約束のとおり私を力づけてください。堅くささえてください。あなたの助けがなかったら私は倒れてしまうから、私は起き上がることができないから。」と。また、「みことばのとおり」と言います。神の約束があることを彼は知っていたのです。だから、神に求めるのです。むやみやたらに何の希望もなく求めているではありません。神が助けてくださること、約束があることを彼は知っていたのです。

思い出しませんか？イザヤ書の中でイザヤがすばらしいことを歌っています。40:29-31「疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。:30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。:31 しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」、神は力を与える方です。悲しみのどん底にいる時に、著者は神のみことばに助けを求めるのです。なぜなら、彼はそこから新しい力を得ることができるからです。

3) 癒し

同じように、為さなければならない癒しの過程があります。ここでも二つの道が記されています。一つは、取り除かれなければならない道、置き換えられなければならない道であり、もう一つは、選ばれるなければならない道です。

◎たましいを回復して行く方法

a. 置き換えられなければならない道 29節

29節「私から偽りの道を取り除いてください。」と言いました。この道は、スポルジョンによれば「罪の道であり、間違いの道であり、偶像崇拜の道であり、愚かさの道であり、自己義認の道であり、形式

主義の道であり、偽善の道である。」と、その通りです。また、別の注解者は、この道は「世の生きている道だ」と言います。「**真実の道**」ということばに対比して考えても、この道とは「**真実のない道**」であることが分かります。それは単に、罪に満ちた道であるというだけでなく、神の方へと足を向けさせない道なのです。間違った方向に進んで行くな、神の方に行かないからです。それは神の知恵ではなくこの世の知恵、その道です。神の知恵に逆らうそれに反する道です。それがここに記されています。今の世の中は神の道とは反れるそれとは違う道がいろいろな形で提示されていることを皆さんもよくご存じですね。ローマ人への手紙 1 : 29 - 32 には「**罪のリスト**」が記されています。このようなものがあります。「**彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、³⁰ そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、³¹ わきまのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。³² 彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。**」、これらは罪です。ここに罪であると宣言されているものは、今この世の中では性格異常、何かの依存症、病気であると扱われています。パウロは I コリント 6 : 9 - 10 でこのように言っています。「**あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。だまされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、¹⁰ 盗む者、貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。**」、ここに上げたリストの中で、今の社会でどれ位のものが罪でなくなっているでしょう？

皆さん、どちらを選びますか？神の道ですか？この世の道ですか？詩篇の著者は言います。「私を守ってください。私から偽りの道を取り除いてください。みおしえのとおり歩むことができるように、主よ、どうぞ、あなたのおきてを私に与えてください。」と。

b. 選び取られなければならない道 30 節

もう一つの道がありました。選び取られなければならない道です。それが 30 節に記されています。「**私は真実の道を選び取り、あなたのさばきを私の前に置きました。**」、偽りの道を取り除かれるだけでは駄目なのです。真実の道が与えられ、そして、その道を選んで歩まなければいけないのです。私たちはなぜ、変わらないのでしょうか？変わらないことの大きな原因は、私たちが真理を知らないからではありません。私たちが真理を行なうことができないからでもありません。なぜなら、神は真理を行なってゆくことができるための助けを与えてくださると約束しているからです。なぜ、私たちはできないのでしょうか？なぜ、変わらないのですか？私たちがその道を選んで歩まないからです。

どのように歩むのですか？「**あなたのさばきを私の前に置きました。**」、私たちは常に、神が示してくださっている道を自分の目の前に置き、「それに服従します。その通りに進んで行きます。」と、そのように言い続けて歩むのです。失敗しないとは言っていません。失敗するから著者は落胆したのです。でも、落胆したときに私たちがしなければいけないことは、まさに、ここなのです。

3. 結論

最後に著者はまとめます。31 節「**私は、あなたのさとしを堅く守ります。主よ、どうか私をはずかしめないでください。**」、時間があって原文で見ることができれば、これほど良く分かることはないのですが、簡単に説明しなければいけません。ここにある「**堅く守ります。**」ということばは、原文を見なければ分からないのですが、25 節にある「**打ち伏しています**」ということばと全く同じことばとして使われています。つまり、地に張り付いてしまってもう立ち上がることができないような落胆の中にいた人物は、張り付いているものが変わったのです。神のみことばに張り付いているのです。それを取り除くことが出来ないと言うのです。倒れて立ち上がることができなかつたこの著者は、32 節「**私はあなたの仰せの道を走ります。**」と言います。単に、歩いているのではないのです。力を得て走っているのです。なぜ、このようなことができたのでしょうか？「**あなたが、私の心を広くしてくださるからです。**」、神が私の心を広くしてくださる、広げてくださるからです。このことばは他の箇所では「喜ぶ、喜ばせる」とも訳されています。深い知識と理解に満たされて心が大きくなる、そのように理解することが出来ます。それゆえに、私はこの困難の状態から深い悲しみ渦の中から走ることができると言うのです。

駆け足で今この箇所を見て来ました。私はこの詩篇 119 篇 25 - 32 節を 3 週間ほど集中して学んで来ましたが、少なくとも、3 回位、読みながら涙しました。この著者が経験する様々な苦しみを考え、自分の経験している様々な困難や状況を思ったときに、皆さん、落胆しませんか？落ち込みませんか？どうしようもないほどの悲しみに包まれませんか？正直なところ、私はあります。著者と同じように思います。「**私のたましいは、ちりに打ち付しています。**」、「**私のたましいは悲しみのために涙を流しています。**」と。でも、そこに留まり続ける必要はないのです。この世のだれが何を言おうと私は気にしませ

ん。神が「私たちは立ち上がることができる」と言われるからです。神はそのことをみことばによって約束しておられるからです。

「人生とは困難」ではないですか？嫌なことがたくさんあります。虚しいと思うこともあるし、もうどうすることもできないと力尽きてしまうこともたくさんあります。「もう面倒だ。生きて行くのがいやだ！」と思うことがあるかもしれません。でも、神には希望があるのです。神を信じる者には希望があるのです。

どのようにしてこのメッセージを終えようかと思いましたが、詩篇の二つの箇所を皆さんとごいっしょに読みたいと思いました。一つは121篇、もう一つは34篇です。皆さん、ぜひ、お読みください。今は121篇を読んでこのメッセージを閉じます。

詩篇121篇

- : 1 私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。
- : 2 私の助けは、天地を造られた主から来る。
- : 3 主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。
- : 4 見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。
- : 5 主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手をおおう陰。
- : 6 昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。
- : 7 主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。
- : 8 主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

詩篇34篇

- : 1 私はあらゆる時に主をほめたたえる。私の口には、いつも、主への賛美がある。
- : 2 私のたましいは主を誇る。貧しい者はそれを聞いて喜ぶ。
- : 3 私とともに主をほめよ。共に、御名をあがめよう。
- : 4 私が主を求めると、主は答えてくださった。私をすべての恐怖から救い出してください。
- : 5 彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。「彼らの顔ははるかすめしないでください。」
- : 6 この悩む者が呼ばわったとき、主は聞かれた。こうして、彼らはすべての苦しみから救われた。
- : 7 主の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される。
- : 8 主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。
- : 9 主を恐れよ。その聖徒たちよ。彼を恐れる者には乏しいことはないからだ。
- : 10 若い獅子も乏しくなって飢える。しかし、主を尋ね求める者は、良いものに何一つ欠けることはない。
- : 11 来なさい。子たちよ。私に聞きなさい。主を恐れることを教えよう。
- : 12 いのちを喜びとし、しあわせを見ようと、日数の多いのを愛する人は、だれか。
- : 13 あなたの舌に悪口を言わせず、くちびるに欺きを語らせるな。
- : 14 悪を離れ、善を行なえ。平和を求め、それを追い求めよ。
- : 15 主の目は正しい者に向き、その耳は彼らの叫びに傾けられる。
- : 16 主の御顔は悪をなす者からそむけられ、彼らの記憶を地から消される。
- : 17 彼らが叫ぶと、主は聞いてくださる。そして、彼らをそのすべての苦しみから救い出される。
- : 18 主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。
- : 19 正しい者の悩みは多い。しかし、主はそのすべてから彼を救い出される。
- : 20 主は、彼の骨をことごとく守り、その一つさえ、砕かれることはない。
- : 21 悪は悪者を殺し、正しい者を憎む者は罪に定められる。
- : 22 主はそのしもべのたましいを贖い出される。主に身を避ける者は、だれも罪に定められない。